J.S.V.R.
ニュースレター

No.22
2015. 11

発行人　日本バレーボール学会
　　会長　河　合　　学
発行日　2015年11月28日
事務局
〒417-0801 静岡県富士市大淵325
常葉大学富士キャンパス 高根研究室内
Tel&Fax 0545-37-2128
E-mail:takane@fuji-tokoha-u.ac.jp
http://www.jsvr.org/

日本バレーボール学会
The Japanese Society of Volleyball Research

巻 頭 言

生活の中にあったバレーボール

日本バレーボール学会会長　　河合　学

先日、某テレビ局から取材を受けました。なにやらクイズ番組の答えの解説に使うのだそうですが、私はその質問を聞いたとたんに、つい“えっ、そんなこと？”と答えてしまいました。その解説してほしい内容とは、なんと『昭和の時代はビルの屋上でサラリーマンがバレーボールやっていたというのは本当です』というものでした。

そういえばそんな風景もあったなと懐かしく思い出していましたが、取材に来たスタッフは「ほんとにそんなことやってたんですか」と半信半疑。若い人は知らないんですね。そこで次のように解説しました。

明治大正期の日本の重要な輸出品に絹織物がありました。その織機工場の工員は圧倒的に若い女性が多かったのですが、その労働の苛酷さはたいへんなもので、それは「女工哀史」や「あゝ野麦峠」などの文学作品に表わされています。私も映画を見て涙を流したものでした。しだいに労働環境のひどさは国内外から批判を受けるようになり、政府による規制のほかに企業も労働者の待遇改善に動き始めました。そして大正時代に工場法が施行されると、労働時間が短縮され、健康増進を目的としたレクリエーションが工場ごとに行われるようになりました。そこで取り入れられたのがバレーボールです。大正時代には日本体育協会の努力により、すでにバレーボールは幅広く普及していたのに加え、織機工場の労働者に女性が多かったこと、ちょっとしたスペースがあればどこでもできたこと、ボール１つあればたくさんの人で楽しめたことなどの理由から、工場の片隅の空き地で円陣パスを楽しむことが工員たちの気晴らしになっていったのです。そして時代は下って昭和の高度経済成長時代までも、工場の空き地や会社のビル横の駐車場などで、仕事着のまま、あるいはワイシャツの袖をまくった男性とスカート姿の女性たちが一緒に円陣パスをする光景はどこでも見られたものでした。そして、ビルが建ち並ぶ大都市で適当な空き地がない場合は、そうです、ビルの屋上に上がって皆でバレーボールを楽しむのがサラリーマンの休憩時間の定番でした。

ちなみに織機工場で楽しまれていたバレーボールはそのうちに工場対抗戦に発展し、切磋琢磨した織物会社のバレーボールのレベルがどんどん上がっていき、9 人制時代から日本の女子トップクラスは織

物会社ばかりでした。東洋紡、クラボウ、日紡（現ユニチカ）、そのなかでも一番だったのは何と言っても世界大会含めて258連勝した日紡貝塚であり、東京オリンピック（1964年）の「東洋の魔女」はほとんど日紡貝塚の単独チームだったという逸話もあります。

いつからでしょうか、会社の昼休みにバレーボールをしなくなったのは。嗜好が変わったというだけでなく、世の中全体が内向きになっているような気もしますが、1つのボールを落とさずにつなぐバレーボールは仕事に必要なコミュニケーション作りに役立つでしょうし、ボールが落ちても皆で笑える楽しさは仲間意識を育む良い手段だったと思います。いつの日か、また皆で声かけ合いながらボールを追うのどかな風景がそこここで見られる世の中になったらいいなと、つくづく思う今日この頃です。

2015年 バレーボールミーティング報告

日　程：2015年8月8日（土）
会　場：紫波町情報交流館・オガールベース
参加者：約60人

今回のミーティングでは「地域から日本のバレーボールを変える～オガールベースの挑戦～」というテーマのもと、綱嶋久子氏、岡崎正信氏を講師に迎え、講演やシンポジウムそして、オンコートレクチャーを行っていただき、地方創成におけるスポーツの可能性や役割、日本の活性化、スポーツの振興、そして、バレーボールの普及発展について皆で考えていく機会を作った。

講演①「アウルズ紫波スポーツアカデミーの役割と可能性」
講　師：綱嶋 久子氏　NPO法人アウルズ紫波スポーツアカデミー

自己紹介

● 岩手に来た経緯

設立して14年目になる岡崎建設Owlsという男子のクラブチームが，次世代に続く子供達のためにバレーボール教室を行っていたが、その一環として講師で来る予定であった東レ・アローズの都合が悪くなったことにより、私に代理の声が掛けられたのがきっかけです。

そのような偶然を経験したことで、クラブチームにおけるバレーボールを世界一すばらしいものにできるよう、千葉県に居ながら応援し続けていた。そんな中、オガールベース構想を聞き、話をいただいたときにすばらしい事だなと思っていました。

しかし、千葉県で家族を持ち生活していたため、当時、岩手を活動拠点にする事は難しいと思っていたのですが、夫の協力的な決断で岩手に行く事を決意したため、今は岩手に移住してきているという状況です。

● 子供と生活の変化

千葉に居るころから、子供達とバレーボールを通して関わってきていた。そして今も子供達との関わりの中で、現在の子供の生活の変化について次のように考えています。

・大きな変化要因の一つとして日常生活におけるトイレが洋式になったということ。洋式に変わったことでしゃがむ動作が日常において減少している。それによって足首や股関節などの柔軟性の低下を感じています。
　バレーボールで大切な構えの体勢を見たときに、その影響を感じている。
・昔と違い、テレビゲーム、スマートフォンの普及普及によって、子供のころから、猫背、ストレー

トネックになっていることで、正しく起立することができないという影響を感じている。

また、身体を動かす遊びも、テレビゲームやスマートフォンの影響で減少しています。

私もよく子供の指導をしているが、体育館に居てもテレビゲームをしている子供が目に付くことが多くあります。また、スマートフォンの普及によって人との会話が減ることや、時間の感覚が狂ってしまうことが懸念されます。

子供は大人と違って日々成長しており、身長、体重、重心が変化する中で運動をしている。身体の長さが変わるということは、例えば、手で打っている所がラケットで打っているような感覚や、身長が伸びると地に足を付けていても厚底のものを履いているような感覚を子供達が日々、感じているということを指導している中で気を付けるようにしています。

つまり、身体の成長によって、今まで出来ていたことが急に出来なくなるということは、子供の成長過程では仕方のないことだと思っています。

● 中学では県大会すら行けなかった私が高校で全国大会を経験出来た理由

高校での練習時間は平均３時間。監督が練習を止めることはほとんど無かったが、その後のミーティング（平均３時間）は､監督からの質問攻めで練習より大変でした。その繰り返しによって練習時間中は、色々な考え方をもって練習に取り組んだ結果、全国大会につながっていったと思います。

高校三年間で学んだことは、感謝することで、いつも恩返しのつもりでコートに立っています。

● Owls 紫波スポーツアカデミーの役割

①リーダーとなり得る人材育成

感謝する心、感じる心を育むことが大切であり、心に思っているだけではなく、思いを行動に示せるように指導しています。

②コミュニケーション能力

挨拶､話せる力､聞く力を育むために「はい」「いいえ」では答えられない問いかけを意識しています。

③自分の身体を思うように動かせる力

変化していく自分の身体に慣れるということで、例え身長が 10cm 伸びても毎日同じ動きをすることで、急に出来なくなるということを防ぐことを考えています。

また、ウォーミングアップを大事にしている。ストレッチを含めて、40 分～１時間かけて行う。成長する身体に目的を持って行っていて、トレーナーにアドバイスをもらい、発育発達のプログラムによる動きの中で習得しています。

ウォーミングアップの目的は、まずはきちんと立てること，その次にしゃがめること、それを基に技術を乗せる土台作りを行っています。

このウォーミングアップを取り入れたことで構えができるように変化してきています。

バレーボールアカデミーが始まって一年が経つが、アカデミーの可能性として、幼少期の頃から本物

の世界レベルのバレーボールの環境に触れさせる機会があるので、普段と違う体育館に行った時に、どれだけ恵まれた環境の中で自分たちがバレーボールをやっているのかを感じさせられる。子供達にとって本物に触れるということは、私が思っている以上に大きいのではないかと感じています。

「おがる」というのは，紫波方言で成長という意味であり、「ガール」というのはフランス語で駅を意味します。紫波中央駅前が紫波の未来を創造する出発駅とする決意をもって「オガール」と名前を付けました。

最後に、子供達の成長を通じて、大人の成長を考え、子供と大人の成長が町の成長につながる、そしてそれが日本の成長につながる。私はバレーボールを通じてサポートできるように頑張っていきたいと思っています。

講演②「地域創生とスポーツ」

講師：岡崎　正信氏　内閣官房地域活性化伝導師　オガールベース株式会社取締役

全国各地から、また海外から、なんの変哲もない小さな町にお越しいただきまして本当にありがとうございます。バレーボールミーティング実行委員長の高野さんは私がさわやか杯に出場した時の同じチームのメンバーだったんです。高野さんは一関に住んでいて、僕は紫波町に住んでいました。練習会場は盛岡だったんですけど、当時は親が練習会場への送り迎えをすることがなくて、いつも一緒に電車とバスを乗り継いで練習会場に行っていました。大阪での第一回のさわやか杯が私が出場した大会なんですけど、ウチの親は応援に来ることもなくて、誰に応援されているのかわからないような形で全国大会に行きました。実は僕は、バレーボールを始めたのは中学２年生からです。１年生までは水泳をやっていました。バレーボールを始めたきっかけは何かというと、素晴らしい先生が男子バレーボール部の顧問に就いたということでしょうか。でも、中学生の当時に素晴らしい先生かどうかなんてわからないですよね。結果論として素晴らしい先生だったということで。バレー部に入った本当の理由は、新しい体育館ができたからです。僕のいた中学校は、僕が中学１年生のときの３年生は、めちゃくちゃ悪い人たちが集まっていました。１年生の終わりごろに新しい体育館ができて、学校側は、３年生は体育館に立ち入り禁止という校則を作ったんです。つまり、体育館にいれば、悪い３年生から守られるんです。だから、体育館に入りたい、だからバレー部に入った、というのが真実です。そこでうちの父親なんですが、当時は所得の低いサラリーマンで、うちは裕福な家庭ではなかった。その父親に、金のかからない部活やれ、バレーシューズひとつだけでやれるんだったらいいよ、といってもらったのが中学２年生です。そこからバレーを始めて、15ヶ月で県選抜に選ばれることになりました。先ほどの綱嶋の話に通じるものなんですが、なんで15ヶ月で県選抜まで選ばれるようになったかというと、私は他人の３倍、5倍は考えていたんです､バレーに関して。いわゆる体の体力というのは限界があるんですが､頭の体力っていうのは鍛えれば鍛えるほど伸びます。今、私がやっている仕事は、日本ではまったくやられていないことなんですが、欧米諸国では当たり前にやられている街づくりです。それは何か？補助金に頼らな

い街づくりです。自分たちの資本を元に銀行からお金を借りる、もしくは、自分たちで投資する、そういう形で街づくりをやりましょうということです。それでやっていきましょう。今この画面にある写真、右上にあるのがいま皆さんがいるオガールプラザです。私は、これを作るために3億円の借金をしました。左上の端にある、去年できたオガールベース、私はこれを作るのに7億円の借金をしました。紫波町役場、ここでは22億円借金をしました。紫波町役場も紫波町役場の持ち物ではございません。民間の企業が建てたものを紫波町役場に貸してるんです。その他に私は火葬場も経営してます。従来柴波町が経営していた町営の火葬場を民間資金で町にお貸ししています。ご遺体を焼くのに一体8万円かかります。ご遺体を焼けば焼くほどお金が入ってくるということです。私が提案する前には一体12万円でした。私は8万円まで下げるから私にやらせろといい、そうやって火葬場を経営しています。今経営し始めて7年です。その経営権を獲得した時の約束は何か、火葬場をオープンしたら10年後すっかりそのまま1円も頂かずすべてお上げしますという件です。紫波町に寄付するんです。今いるここも公共施設です。ここは紫波町の持ち物です。しかし、企画から設計から、何から何まで私の民間の会社が行いました。当初10億円かかると言われたこの図書館、情報交流館は私たちの会社が7億6千万円で作りました。7億6千万円で作って、それを8億1千万円で売ったのです。5千万円が我々会社のフィーです。けど、町民の負担は2億円減った。施設の中にある産直も、農水省の補助金は1円も頂いていません。すべて自主事業でやってます。去年の売り上げは4億6千500万円で岩手県で2番目の売り上げを誇る産直となりました。今日の午後、オンコートレクチャーで使っていただくオガールアリーナもすべて借金で作りました。バレーボール体育館を借金してまで作るなんて、誰思いつかないし、考えようともしない。まず、最初からどうせ無理だと思うはずです。紫波町の町づくりはどうせ無理といわれることをあえてやります。考えます。考え抜いた結果無理だったらそれは無理なんです。しかし、大体において、こういうことはどうせ無理だというのは、周りが言うんです。やったことのない人達が言います。僕はバレーボールを始めたときに、いずれ強い選手になりたい、強いチームのメンバーになりたいと考えました。そのためには何をしなきゃいけないか？考えるしかないんです。一日24時間のうち、20時間は体は動かないんです。練習で動いたってせいぜい４、5時間です。だから、残りの20時間をどうやって過ごすか、そこで差が出てくるんです。紫波町は金がなかったんです。

この話を今日させていただきます。自己紹介を私からも簡単にさせていただきます。紫波町出身です。大学は東京の大学に進学しました。バレーボールは高校3年で腰の骨を二本折るという怪我をしてしまい、現役は諦めました。しかし、就職した後、横浜のクラブチームに入って、今、全日本ユースの監督をやっている三枝君とかと一緒にバレーボールをやっていました。大学卒業後、地域振興整備公団、現在の都市再生機構、いわゆる政府系の公団に入りました。私が就職したのは平成7年で、バブルがはじけた時期です。東京では就職戦線は超氷河期といわれる時期でしたが、私のいた大学はまだ歴史のある大学だったせいか、それなりに求人がありました。地域振興整備公団なんて、何やってるところか全くわからなかったんですが。就職は超氷河期でしたし、安心感がある就職先を探していたら、私の先生がお前の成績だったら推薦書が書けるよと言ってくださって推薦書を書いていただき、公団に入りました。資本金

１兆４千億円の会社です。１兆４千億円、国民の税金が入ってるだけの話なんですけどね。そこで私がラッキーだったのは、地域公団で出会った上司が、すべて、建設省から出向していたキャリア官僚だったことです。要は、私が配属された部署は新しい仕事をやる部署だったということです。地域公団をプロパー職員では、全く経験値がないのでそういったところには国の官僚がごそっと来るんです。そこで私が何を叩き込まれたか？法律による街づくり、都市再生を徹底的に叩き込まれました。地獄でした。どれだけ地獄か。朝会社に行きます、当然です、サラリーマンですから。帰るのは始発の電車です。朝9時会社に行って日を跨いで4時30分の地下鉄で家に帰ります。そしてまた2時間にまたシャワーを浴びて出てくるという生活を2年間続けました。昨今、世の中でブラック企業とか言ってますけど、私の経験からすると、オフホワイトくらいの企業しかないと思います。月の残業時間230時間、240時間ざらでした。頂ける残業代15時間です。けど文句言わないでやるんです。なんでか、何にもわかんないんです。わかんなかったらやるしかないんです。２年間そういう生活をしていけたら、われわれ総合職で入った人間は３年目には地方都市の事務所に行くんです。地方都市にいいって、どこかの現場に行って、そこをまとめる。岩手でもやりましたし、沖縄にも、北海道にも事務所はあります。事務所がないのは３大都市だけです。で、地方都市にいけると思ってうきうきしていたんですね。その時、私の上司だった官僚も２年ごとの移動で建設省の本省に帰るタイミングだったんですね。で、私は首根っこを捕まえられまして「今度はお前が建設省に来て俺らの仕事を手伝え」と。建設省都市局都市政策課というのは気づいたら官僚になっていたというような不思議な人事のあるところなのです。この都市政策課というところは、日本の都市行政、都市再生、今回の地方創生でも中心を担っている部局です。私がいたときには課長以下23人の課員がいたんですがそのうち20人が東大法学部卒のエリート中のエリートでした。都市政策課の課長をやればほぼ十中八九事務次官になっています。私がお仕えした二人の課長さんは、お二人とも事務次官になりました。ここで、ものすごい人脈を作ることができたんです。人脈って何か？私が一方的に知っているのは人脈っていわないんです。相手に知ってもらって初めて人脈っていうんです。復興庁の事務次官、国土交通省の事務次官は、私のことを知ってるんです。この事務次官さんがある組織に天下りしました。このプロジェクトをすごく応援してくれる組織で、そこの理事長になられました。そして、その方が私に会いたいとおっしゃってくださった。今月末にお会いすることになりました。そういった、ほとんどの人が経験できないような都市再生の中でも日本の中枢の中で立法することができた。そこで作ったのが中心市街地活性化法という法律です。私は理工学部土木工学科出身です。全く法律とは無縁のところで法律を作ったんです。そのときは正義だと思いました。街中に商業を集積されれば町は再生する、街中にある商店街や疲弊した商店街を再生させれば中心市街地が再生するという安易な考えで作ったのが中心市街地活性化法です。けど見事に私は間違っていました。そうこうしている内に父が癌で亡くなりまして実家に帰らねばならなくなったのが2002年です。愕然とするわけです。国の中枢で地方再生だ地方創生だ地方活性化だ商店街の活性化だと偉そうに言っていた私たちが作った補助金をばらまく政策がものの見事に地方をダメにしていました。だから紫波に帰ってきて、ふと思ったんです、自分のやってきたことはなんなんだろう。しかし、2004年の12月をピークに

この局面が変わりました。黙っていたらどんどんどんどん人がいなくなる社会なんです。このときに町はどうあるべきか町はどう生きていくべきかバレーボール界はどうあるべきかっていうところを考えないともう茹でガエルが如く気づいたら死んじゃったんです。私が役人時代にやった仕事をひとつ紹介します。岡山県の津山市という城下町です。今の人口は9万人ですが、その当時は11万人はいました。そのど真ん中に天満屋という百貨店をキーにした再開発ビルを165億円かけて造りました。私の所属していた地域振興整備公団はこの再開発ビルの上層階にありました。この4つの部分の立体駐車場を整備する第三セクターに私の判子ひとつで15億円を出資しました。国民の税金です。地域振興津山株式会社という会社を作ってそこに国民の税金15億円ぶち込んだんです。その地域振興津山株式会社はこの建物のオープンした半年後につぶれました。私は半年で国民の税金15億円、この一本のプロジェクトで焦がしたんです。こんなことを銀行員がやったら半沢直樹どころではないですよ。でも国民の税金を勝手に焦がした役人はだれも責任を取りません。私も生き延びてます。この公団は今都市再生機構になりました。偉そうに都市再生機構のアドバイザーになりました。都市再生機構の中堅職員、中間管理職職員研修の講師、一か月前に終わりました。その研修の一週間前、たまたま岡山県に仕事があったので津山どうなってるのかなあと思い見に行きました。自分のやった仕事どうなっているかなあ。こうなってました。平日、昼、午後1時半の風景です。人っ子一人いませんでした。三つのアーケードがあるんですがすべて先ほどの再開発ビルにつながっています。パンクロックだけが悲しく流れているアーケードでした。都市は再生してないんです。全く再生してない。スポーツ界も同じです。今のままではどんどん、どんどん、多分悪くなっていきます。なぜなら国の公共事業費は約6兆円だからです。たった6兆円です。これにはスポーツ振興費も含まれています。GDPが世界3位といわれている国の公共事業費がたった6兆円しかないんです。その一方で、毎年増える社会保障費は約1.6兆円です。毎年増えます、確実に。こんなのすぐに予測できます。後数年で公共事業費は枯渇します。次に、地方交付税と教育に関するお金もどんどん削られていきます。確実に削られていきます。こんなことは、霞ヶ関の連中は平成4年からわかっていたんです。だから、税金を下げないんです。上げる一方です。ですから、私は今、バレーボールを含めたスポーツ界は、すごく危惧していると思います。スポーツやっている場合じゃないっていう時代が目の前まで来ているんです。今、この現状を改善しないとおかしくなるんです。まず、自治体がつぶれ始めます。大学で講義もしました。学生たちは言ってます、公務員になりたいやつはいないだろうなって。真っ先につぶれるのが公務員だと思っているからです。ぜんぜん安定しませんからね。地方交付税が削られたら、ほとんどの自治体、1700ある自治体の8割がつぶれます。自治体がつぶれたら人が流出します。夕張市は12年前に破綻しました。この12年間、不名誉な日本記録を樹立し、さらに今もその記録を続けています。何でしょう？人口流出率、12年連続ナンバーワンです。さらに企業もなくなります。経済活動がなくなり、教育関係者、公務員すべての仕事がなくなります。夕張を見ればすぐにわかります。税金を払えど払えど、景気はよくならない、福祉もよくならない、生活環境

もよくならない。こんな町に住む義理は我々にはない、だから札幌に行こう、旭川に行こう、千歳に行こう、とみんな出ちゃうんです。残ったのは公務員だけ。大変なことなんです。岩手県紫波町 3 万 3 千 7 百人、県内で一番昼間の人口率が低い。要は働く場所がないんです。これをどうする。こちらは、今、皆様方が座っているところから紫波中央駅を見た 2007 年の写真です。当時の、町長と私と副町長です。町長と副町長に挟まれた建設会社の青年が何て言われたか、「土地はあるぞ。」ここからですよ、スタートは。前の町長は本当に素晴らしい人でした。この土地を買った時もハンコついたんです。契約者は前の町長なんです。けど前の町長が町長になる前に議決された案件なので町長としてはハンコをつくしかなかったんです。けどそのあと前の町長は何をやったか、実現不可能な無責任の計画を言ってきたコンサルタントが提案した 170 億円かかるプロジェクトをすべてストップしたんです。この土地、12 年間ほったらかしで、それを 28 億 5 千万で買ったんです。町民からは、日本一高い雪捨て場と呼ばれています。で、2007 年に町長に呼ばれて、「土地あるよ、何とかしろ」と言われたんです。民間人に何とかしろという役所の長が世の中に存在するんだということを、私はこの時に初めて知りました。これ後から調べたら、欧米では当たり前なんです。紫波町にとって一丁目一番の一等地です。 28 億 5 千万かけたんです。皆さん方の町でも一丁目一番地に一円も稼がない公共施設ありませんか。本来、税金で稼ぐべきところに逆に税金を食いつぶす施設を造ってきたのが今までの公共の仕事なんです。一丁目一番地なら、税金を稼ぐ、少なくとも人がたくさん来るエリアを作りましょうよ。何のために地域を活性化するのか？地域の課題は何なのか？本当に人口問題なのか？元岩手県知事が書いた「地方消滅」という本がありますね。あの本にはなんて書かれているのか。「人口問題を起因とした自治体消滅が今後日本に起こりうる」と書かれています。確かに自治体が消滅するってことは自分もその通りだと思います。ですが、私は人口問題じゃないと思います。人口問題というから、またおかしな施設を造りたがるんです。あれは完全に公共事業としての金をばらまくまでの自民党さんの策略でしょうね。すべての入り口は違和感なんです。なんで今まで公共がズルやってきちゃったんだろう。自分を含めて、８年間役人をやってきて、東京の中枢でやってきて、俺って一円も稼いだことないのに、なんで偉そうに再開発ビルに金突っ込んだんだろう、偉そうに区画整理事業に道路や公園に金突っ込んだんだろう、一円も稼いでないじゃん、こいつらって。逆に社会資本コストが増大に増えてる。私がばら撒いたおかげでさっきの津山も建物なんてのは津山市民が 20 億円税金で買ったんです。それを第三セクターの私有にしたんです。え、俺がやった仕事って地元の市民を苦しめてるんじゃないのか。そんな違和感があったんです。信じられないと思いますが、4 年前このエリアの写真がこれです。この右下にあるサンビレッジ紫波というのが、厚生省の外郭団体の雇用促進事業団が作ってくれたこの建物だけだったんです。あとは全く使われてない雪捨て場。馬鹿にされるんです、日本一高い雪捨て場って。で、なぜオガールに関わったのか。前の町長さんに頼まれたのが大きいです。何か紫波町が元気になるようなこと、僕はこれのことを営生権と呼んでいますが、生きるための営みを起こす権利を紫波町民が持たなければこの町は良くならない。この営生権という言葉、誰が言ったか。関東大震災の後、あの大復興を遂げたのはヒーロー一人だといわれています。後藤新平です。後藤新平さんは岩手県出身です。今回の東日本大震災でも平成の後藤新

平は誰なのか、って皆が騒ぎたてます。この後藤新平に対して唯一、異を唱えたのが一ツ橋大学の経済学者、福田徳三先生です。福田徳三先生は後藤新平に真っ向から対立しました。道路や公園や建物は人が生きるための手助けにしかならない。本来人が生きるためには何か、仕事がなければ住む場所がなければ。そういった生きるための権利っていうのを大事にした復興こそが本来の復興のあるべき姿である、と。税金をじゃぶじゃぶ流し込んで、道路や公園を作ることが復興ではないと言い切ったのが福田徳三先生です。私は福田徳三先生の本を読んで思ったんです。自分は建設会社を継ぐために帰ってきたけど家業である建設会社だけが潤うということは絶対にないんだと。ウルトラマンや仮面ライダーはもういないんです、世の中には。自分たちで何とかしなきゃいけない、生きるための権利を営む権利を獲得しなければいけない。そこで気づいたことが、経営なんです。まちづくりの構造は域の経済の循環と域外の経済の循環の流入をしないといけない。私のいた都市再生機構は何をしていたか、都市のフランチャイズをやっています。どこに行ったって同じようなものを作ります。そして、呼んでくる企業さんは全て東京資本、大阪資本です。だから、域内の経済を流入したつもりが域外に持っていかれているわけです。我々がやらなきゃいけないことはなにかと。道路、公園は後から考えればいいんだと。どうやって稼いでそれを税金として納めるかということ、そのシステムを作るしかないんだと考えたわけです。だから民間の資金でやりましょうと。私が８年間役員としてやってきた仕事の大きな大きな失敗は補助金をばら撒いたことです。お金もらっちゃったら、何も考えなくなりますよ。子どもがお小遣いが欲しいとねだったからって、バンバンあげてたら、稼ぐ力なんて身に付かないですよ。うちの親父は土建を立ち上げました。うちの父親は山形出身なんですけど小学５年生、10 歳の時に一人東京に追い出されたんです。お前は末っ子だから甘やかされるって言われて東京の大田区にポーンと追い出されたんです。それから日本大学を卒業するまでの 12 年間、親に一度も会っていなかったそうです。だから親代わりは日大三高の先生だったんです。この先生が、親父が会社を起こすって言った時に来てくれたんです。東京から。その先生の言葉を聞いて僕は涙を流しました。岡崎はいつか社長になると思っていたというんですね。こいつは 10 歳から自分の生活を守るためにとにかく働いた、家の手伝いをした、周りの手伝いをした、と。隣の老夫婦の家庭菜園があったんです。老夫婦に 50 円のお駄賃あげるからここを耕してくれと言われたんだそうです。そうしたら父は、仲間を五人連れてきて、手伝わせ、そいつらに 5 円ずつ渡して自分は 25 円を受け取ったと。そういうチームを作り、稼いでそして給料を与えるシステムを作るということを、生きるためにやってきた。だから岡崎はいつか社長になると思っていた、と。だからこそ、今までやってきたやり方と全く違うやり方で、自分たちで稼ぐぞと、公と民が連携した街づくりをやりましょうと開催したシンポジウムでプレゼンしたところ、230 人ぐらいの参加者がいたんですが、罵声を浴びせられました。帰り際なんてひどい言葉浴びせられました。けど、その人たちはやったことのない人達です。やったことのない人間にどうせ無理と言われたんです。

新聞社にも叩かれました。ひどいところなんか黒船襲来なんて書いてました。今その新聞社はどうしているんでしょうか。何かプロジェクトが完成すると広告出しませんかと聞いてきます。けど、このスクラップブック全部僕綴じてます。新しく来た営業マンに必ず読ませます。これ読んで営業マンはその

まま帰っていきます。ここで折れない営業マンはそれでもこれをこうでお願いします、と。今、地元新聞会社とはうまく良好に付き合わせていただいています。

こんな田舎でもいいもの作ろうと、そのとき応援してくれたのは前町長さん一人だけでした。町長に言われました。「おい岡崎君、民間会社には経営理念、会社理念が必ずある。だからこのプロジェクトも理念作れ」と。作りました。2008 年です。単純に政府から予算を獲得して、ものを作るんじゃないよと、そんなの地方創生でも地域活性化でもなんでもねえ、そのものから受けるベネフィットとコストをオープンに話し合えと。この図書館、教育委員会が企画しました。その時の建設コストは 10 億円でした。今日時間ないので話しませんがこれ（コスト）をどんどん単価に戻すことがビジネスの基本だと思っています。一冊貸し出すのにどれくらいのコストがかかる図書館をこの人たちが企画しているのかを計算しました。そしたらですよ、一冊貸し出すのに 1000 円コストがかかるんです。皆さん方の町の図書館でも一冊貸し出すのに 600 円ぐらいとられてますよ。それを我々はオープンにしたんですよ。町民の皆さんにオープンにしました。さっきも言ったように、町の一等地にコストセンター作っちゃダメなんですよ。そんな余裕一つもないんです。だから、日本で一番安い、コストがかからない図書館を企画するぞと言って、目標値を一冊当たり 200 円にしました。コストを 1 ／ 5 に下げました。そして、経済合理性のある数字からとり得るリスクを抽出しようと。とり得るリスクとは先ほど言った 1000 円じゃとり得ないよと、町民に知らせたら。けど 200 円だったら町民のリスクとして町民の皆さん、理解してくれるんじゃないかと考えたんです。なぜ街づくりを民間企業がやったほうがいいか？大きな理由の一つは、民間企業は無理なことはやらないということです。そして、その計画が無理かどうかを最終的にジャッジメントしてくれるのは金融機関、稼ぎのプロです。霞が関（公的機関）は稼いだことのない人達が審査しますから、東大の法学部を出ても、一円も稼いだことのない人はあるプロジェクトが儲かる儲からないということが分からないんです。金融機関は作る時の金なんか全然気にしないんです。作った後どうやってこいつら儲けるのか、そればっかり考えてます。この「理念」を作りました。そして造ったのがこの建物です。この建物はオガールプラザと呼ばれる会社が建てました。オガールプラザ株式会社は、私が社長です。このオガールプラザを作る会社を私が作りました。そこに政府から出資金を借りました。一番リスクが高いものです。この矢印の向きは全てお金の向きです。出資金を政府から預かって足りない部分を地元の銀行から融資をしていただきました。ここには、資金調達としての補助金という言葉が一つもありません。つまり、すべて生きたお金です。返ってこなきゃいけない、返さなきゃいけないお金です。それで、資金を調達して、12 年間ほったらかしにされた紫波町に対して地代と固定資産物を発掘する建物をつくっているんです。紫波町から土地を借りているんです。民間の建物ですから、当然、固定資産税という税金もかかっています。紫波町は私が払った地代と固定資産税を原資に紫波町民に対して図書館の運営を行っているんです。我々は、民間が稼いだお金を紫波町に納めて、紫波町はそのお金を元に町民に対してサービスを提供していくという流れを作っています。これを稼ぐインフラといいます。紫波町はどんどん面白いことやれと言われます。それが我々との協定です。面白いことやってそれで人を増やしてくれれば、ここに九つ入ってるテナントさんは、喜んで家賃とテナント

料を払ってくれる。ここから政府に対した配当金を出して、国民に対しては配当金を出して、銀行に対しては返済金を出してこういう流れでお金をぐるぐる回していくわけです。オープンして3年間一回も有給率を100%ずっとキープです。当然一度も返済を滞ったことはありません。そうやって紫波町のコスト、紫波町に稼がせて、貢いで、そして図書館を経営していく。だから、千円かかっていた図書の貸し出しコストは200円まで下がったんです。これをあの体育館に応用したんです。オガールベースは56部屋あるホテルの営業利益を体育館の維持管理、運営、返済金にあてているんです。だからそこにビジネスを起こさなきゃいけない。そのビジネスとは何か、合宿ビジネスです。平日の稼働率は周辺のホテルの稼働率によりある程度予想はつきます。問題は平日以外の稼働率です。7日間あるうちの金土日、つまり三日間はビジネスユースはなくなります。その7分の3にいかに稼ぐか。僕はスポーツだと考えています。合宿って言ったらスポーツなんです。けど作ってみたら面白いこと起きるんです。昨日まであのオガールアリーナ誰が使っていたか、小学校のマーチングバンドですよ。マーチングバンドの合宿に使うわけですよ仙北小学校が。すごく怖いですよバレーの監督並みに怖いですよもっと怖いですね。あの女性の先生。音楽の先生。文化もへったくれもないですよ、怒鳴りちらして。すごいですよほんと小学生たちの動き。ここで何をわかっていただきたいかというと、立地環境というまやかし、です。おかげさまで日本一高い雪捨て場と言われてきたこの土地、商業を中心としないまちづくりで稼ぐインフラという発想でやっていますが、年間 100 万人の方が来てくれています。入居してくれたテナント達、投資家、民間一つも出ていっていません。逆に多くのところが入りたい入りたいと言ってきてくれます。それを知ると、何にも考えてこなかった地域団体、何にも考えてこなかったコンサルタントは、ここは立地が良かっただけだよと言ってくるんです。ああそうですかと、だったらこの紫波中央駅から南に 1.5キロ行ったところに日詰駅という駅がある。その駅前の区画整理が3 年前に完成した。なんでこんなに空き地があるんだと。こんな感じですよ。地権者の皆さんは、月極め駐車場の漢字すら間違えたりしますが誰も注意しない。つまり、誰も興味がないんです。ここから、たった 1.5キロしか離れていません。立地の問題ではないということです。これが、人口が増えるときに、俺は都市計画のプロだと言っていた大学の先生方やコンサルタントが作った従来手法の土地価格整理事業というやつです。僕はこれを都市再生機構のときに一生懸命やっていました。今、被災地では、都市再生機構の人が来てこればっかりやっています。だから言うんですよ、被災地の人が来たら視察にたくさん来てくれますか。みなさんたちの将来像みせますよ。これですこれ、人口は増えてるんですよ紫波町、増えているにも関らずここには誰も住もうとしないんです。オガールエリアは、岩手県で唯一、2 年連続で地価があがったんです。この周辺 600 人、人口が増えました。固定資産税は当然増えます、住民税も増えます。結局そういうことで税金を稼がないといけません。岩手県で一番働く場所がないところを、なにを目指して開発したのか。町長に日本で一番住みたいまち、住みやすい街を作れと言われました。企業誘致なんてしなくていい、とにかく住んで幸せと思えるような町の中心を作ってくれと。それでオガールという名前を付けたというのが公式発表、真実はうちの家内が付けました。いまだにテレビ新聞に名前が出る度に著作権料を請求されます。偉大なる嫁です。ライフスタイルを考えましょう、おいしいワインが飲める、コーヒー

が飲める、高い自転車に乗ったやつが集まる、オーガニックな食材に溢れたエリアを作る・・。実は、本来の都市計画はこういうことなんです。住んで楽しいか楽しくないか、おいしいもの食えるのか健康なものが食えるのか、ここで幸せに死ねるのかっていうところを追求しないと、人は集まってこない。そこには必ずスポーツもある。もうひとつ、ピンホールマーケティング。いろんなところで、どうせ無理と言われてきました。今までやってきたオガールプラザ、さっき説明したオガールプラザの資金フレーム、資金スキームにしても、最初は、みんなから反対されました。こんなの絶対できない、と。でも、そういうことはやったことがない人が言うんです。バレーボール専用の体育館を借金して作るって言ったら、いよいよあいつは馬鹿かと言われました。我々はどういう考え方でやっているのか。マーケットは小さいんだけれども手つかずのマーケットが存在しているわけです。そのマーケットにミートする専門性を追求すると地球の裏側まで見えるんです。つまり、奪いに行く戦略から来てもらう戦略に仕事を作っていくということです。これを我々はピンホールマーケティングっていう言葉で呼びます。ピンホールというのは針の穴です。針の穴みたいに小さいマーケットなんだけども小さい穴にもう一本針を刺したらどうなるか、尖がるわけですよ。尖がったらどうなるか、遠くから見えるようになるんです。日本全国に 2000 を超える野球場があります。野球とバレーボールのマーケットがどれくらい違うかというと、野球が 8 に対してバレーボールが 1 です。巨大な野球のマーケットと思われるんだけども、バレーのマーケットは、野球の 1/8 もあるんだって僕は思うんです。野球の 1/8 もマーケティングの規模があるのに、バレーボール専用体育館ってないんです。なんでナショナルトレーニングセンターに行かなければ一流の床を使えないのって思うわけです。JT さんにはありますよ、バレーボール専用体育館。そう、バレーボールっていうのは多目的体育館を使えって言われてきたんだということです。我々民間企業からすると多目的という言葉は無目的なんです。全く魅力がない、全く魅力がないからこそ、そうだバレーボール選手のトレーニングセンターいわゆるプレイヤーズファーストで体育館の企画運営をしていったら、これはもしかしたら下手すりゃ 2020 年の東京オリンピック前にどこかのチームが合宿に来てくれるんじゃないのかと思っていたんです。そうしたら、今年（2015 年）の 11 月、東京オリンピック事務局ナンバー 2 の村里さんと早稲田大学の原田先生と私とでシンポジウムをやることになりました。岩手にチームを持ってくぞ絶対。思うんです、僕はブラジルかポーランドのかわいい女の子に来てもらいたいんです。真面目にそう思ってます。だから、日本と同じグループにはいってもらいたいと思っています。大変だろうけど。これ、一か月（東日本）インカレがあったんです。日体大と法政ですよ。ガチンコを見れるんですよここで。一か月前、綱嶋久子が呼んできた東レアローズの女子が合宿に来てくれました。先々週は東レアローズの男子が来てくれました。2 週間。9 月にはＦＣ東京さんも 10 日間、来てくれます。小学校の体育館よりも狭い体育館ですよ。ですけど、いろんなこと考えています。アタックラインあるいはエンドラインの上には照明を重ねないとか、細かいこと、誰も気づかないような施設管理、施設運営はディテールですが、こういうディテールに魂が宿ると考えています。一つの体育館ではありますが、そこで、どれだけ僕がアピールできるかというのが問題なんです。営業マンもそう、言ってみれば、営業マンもそうですね、V リーグの方々、全日本の関係者が来られると必ず言われるのが、「トレーニン

グ施設、ほしいよね」ということです。来年の 11 月にオープンします。トレーニング施設の名前だけは決まっています。鳩胸力動クラブっていいます。私が尊敬する全日本中学選抜の日笠先生が何度もここに来てくれて、何度も指導してくれました。だから、56 部屋ある内、一つの部屋は日笠って名前を付けています。ここは日本一をとった選手、監督以外泊まれないっていうことです。そういう部屋を一つだけ作りました。その日笠さんが鳩胸力動クラブという名前をくれたんです。そしたら、日笠先生から、お前、来年トレーニングルームがオープンするのに、社長が鳩胸じゃなかったらかっこわりいだろって言われて、僕 4 か月前から腕立て 200 回やり始めました。で、これぐらいビルドアップしてきました。清原化してきたと言われました。都市経営から見る PPP についてお話します。PPP というのは公民連携、我々が今やっている手法のこと、パブリック・プライベート・パートナーシップです。これがいわゆる欧米の都市再生の基本原則であり、基本の手法です。民間は原則的に制度を守る義務がある。制度で許される範囲で経済活動を行わなければならないというのが民間人です。一方、官すなわち紫波町、岩手県は、制度を変える権能を持っているんです。だから、政府の役割は制度を守ることではなくて、今、人口が減るという局面の変わった時代に沿った制度を構築し、以下に民間に稼がせるかということを考えることが大事なんです。だって税金を稼がなければあの人たちの給料は無いんですよ。教育だってできないんです、今のままじゃ。だから、民間に稼がせる制度を作るということが、僕は本当の地方創生の柱だと思います。残念ながらそういう発想を持った官僚はいません。唯一政治家で私の意見を汲んでくれているのは小泉進次郎だけ。小泉進次郎もここに来ました。今月末に一緒にシンポジウムをやります。彼とシンポジウムをするのは 5 回目です。けど彼がひとりで頑張ってもまだ無理なんですね。都市再生に必要なスキルというのは都市の問題、財政課題を解決するスキルです。活性化という公共は民が担い、再配分という公共を官が担う。今までは政府、官側が活性化っていう公共を担ってきたから、活性化しなかったということです。中心市街地起爆剤と言って再開発ビルを建てたら違う意味で起爆してるんです。皆さん方の税金がどんどんどんどん垂れ流しになってるわけです。だから活性化という公共は、稼げる民間でやりましょう。体育館もそうです。稼げる体育館を作ればいいんです。なんでみんないつも税金税金って言い訳する指導者の方々大嫌いです。どんな言い訳するか、体育館が取れないなら、作ればいいじゃん、知恵を絞って作ればいい。そうすると今度は冷暖房がなくって、という。冷暖房、つければいいじゃん、それくらい稼げばいいでしょ、と思うんです。だから、何かっていうことですね、オガール的思考でバレーボールというスポーツを考えたら、なにが重要かと言ったら、営業なんです。営業。黙ってても人は来ないんです。バレーボール人口がどうなっているのか、ひどいですよ、これ。2001 年と 2014 年で比較して、中学校の生徒数の減少率は 10.5%しかないんです。しかし、バレーボールをやっている中学生は、特に男子で、39.8%、約 40%も減っている。だから少子高齢化じゃないんですよ。少子化じゃないんです。女子の減少率は 26%です。この理由は何かということです。中学生の数は 10%しか減っていないのにバレーボールをやる中学生の数が 40%減ってるいるのはなぜか。バレーボールの業界に変なことが起きてるんですよ。これを単なる少子化問題だっていうところで結論付けてしまっているのでは何の対策も講じることができない僕は思います。国際大会においても優秀な成績を

残していない。確かに少子化による影響はあると思いますが、それなら目標はマイナス 10%でしょう。けど現状はマイナス 40%です。特に男子は、バレーボールが義務教育の延長線上のみで発展してきたという歴史があり、これは一つの弊害です。だから、学校のバレー部の数自体が少なくなっています。だから、競技人口が減ってきてるんだと思います。バレーボールを教えられる先生が減ってきたということもあると思います。僕がバレーやってた頃から、いろんな学校環境が変わりました。体罰だってすごく厳しく管理されます。部活だって一生懸命やれない。そういう環境がある。じゃあ、綱嶋久子がヘッドコーチをやっている OWLS 紫波バレーボールアカデミーはどうでしょう。オープンして一年ですが、90 名の生徒がいます。お金を払ってまでバレーやりたいって子 が 90 人います。男子はほどんどがサッカーをやっていたんです。なぜ？今日のオンコートレクチャーを見てもらえばわかりますが、我々は小学生に対しては大会に出ることを目標としていません。運動能力を高めることを目標とします。ですから、とにかく、たくさん、ボールを触らせます。遊ばせます。サッカーやめてきたやつは、なんでサッカーやめてきたかというと、サッカーやってた時よりもボールたくさん触れるからです。これなんです。だから、細かいこと言いません。とにかく運動能力を高めて関節を柔らかくして、それなりに自分たちが人間としての行動を、動きをマスターしたうえで、フォームづくりをしていこう、と考えています。そうすると、今まで学校でまったく目立たなかったやつでも、一つ、自信を持てたわけです。バレーボールを続けて、多動児って呼ばれてた子が落ち着き始めたんです。不思議ですよ。7 年前なんか本当に怒鳴りちらそうかと思うくらいちょろちょろしてた 5 年生が、今、合宿やると先頭に立って下級生の面倒を見ます。うちのチームは大会は年に一回しか出たことないんです。ファミリーマートカップしか出ないって決めています。だから 6 年生はそのファミリーマートカップが終わってもずーと練習に来ています。なんで？遊びたいから。義務教育の延長線上でバレーボールが繁栄してきた弊害をまとめます。進学する中学校にバレー部がなければバレーと触れ合う機会が激減する。だからさっき言った 90 名の内の 40 名弱中学生なんです。中学生がバレーを習いたいと来るんです。女子なんか今 12 の中学校から来ています。片道 2 時間かけてくる子もいるんですよ。それがね、また背が大きいんですよ。中学生女子で、今 174cm というのが 2 人います。一人なんて入ったときこんな感じの体型でした。それがさっき言った、要は人間としての動作を身に付けるためのウォーミングアップでしっかり一時間汗流すとすらっとします。彼女伸びますよ。長かった髪をばっさり切りました。やる気が出てきたんですね。ですが、当然、県選抜の選考会なんて絶対呼ばれません。そういうレベルじゃないから。けど 174cm ある、1 年で体型が変わってやる気を出したんです。だって合宿終わった後、三人残って 4 時間個人練習したんです。バレーボールが大好きになっちゃったんです。我々が担う普及と強化。日本協会さんが全てのリスクを負うっていうから、日本バレーボール協会はおかしくなるんです。おかしくなるっていうか無理だ無理だと言い出しました。だから我々は別に日本協会がやってくれなんて一言も言われてない。勝手にやります。けど応援してもらいたいから、常に日本協会に行ってはこんな状況ですよってことをお話しています。いきなり私が日本協会に行くと向うは構えるわけですよ、金くれってこいつ言うんじゃないか。一円もいりませんから、どうぞ合宿とかでお使いになられたら幸いです。私がやれること。拠点

の整備です。右上がオガールプラザです。このコンセプトは知の拠点を作ること。考える能力を高める拠点を作る。下にあるのがオガールベース。スポーツの拠点です。拠点の整備っていうのは街づくりの大事なことなんです。要は中心なんです。中心がないものには取り巻きは生まれないんです日本の町っていうのは中心市街地って言って盛岡なんか600ヘクタールですよ。東京ドーム何十個分を中心市街地っていうんですよ。そんなん中心じゃないですよ。中心っていうのは中心なんです。だから地の拠点を作りましょうと。もう一つ、育成活動していきましょうと。岡崎建設 OWLS っていうのをトップチームにしてその下に U-15 及び中学生グループ高校生のカテゴリーだけで受けてます。あと社会人、クラブチーム、トップチームが去年クラブカップで優勝できました。今年も来週行われるクラブカップで 2 連覇を狙って今必死に練習しています。人材育成のあり方も考えています。課題解決力をもった人材、経営力のある人材を育成したいと。現状の教育とは何か、失敗しない人材を育てるんです。失敗すると怒られるから、みんなチャレンジしない。「どうせ無理」っていう言葉に甘えているんです。だから我々はアカデミーの子達には「どうせ無理」って絶対に言いません。なんかやりたいって言うと、やってみろっていう。「おなかが痛い」って言ってきた子には、「だからどうした」と。要は察しない優しさがあるんですよ。今は、家に帰れば、「おなかが痛い」って言った瞬間におかゆが出てくる時代です。我々は子供たちが「おなかが痛いです」って言ったら、「だから何？」って返します。こういうことを繰り返してると、やがてこういう返事が返ってきます。「おなかが痛いです」。「だから何？」「だから今日 2 時間の練習は日本一大きな声を出して応援したいと思います」と。自分がやれることを言い始めるんです。だから我々も岡崎建設 OWLS の幼稚園児までのコンセプトはできるできないじゃないんですよ、やるかやらないかなんです。本能的な違和感から、僕は、地域の課題については、バレー界の課題と同じような感情を持ってます。財政の問題と育成問題。それを解決する方法たった一つです。稼いで持続するシステムを作らないと僕はバレー界も地域も絶対なくなると思います。稼ぐんです。そのためには何が必要か、営業です。営業。だから綱嶋久子が営業なんてやったことない、事あるごとに営業やれ営業やれって言ってます。もはや指導要領の枠組みで人材を育成する時代ではないと思います。僕は、バレーというのは、社会に出る時に必要なことを教えてくれるスポーツだと思います。まあネットスポーツってこともありますし、落しちゃダメ、触っちゃダメ、判断と決断を同時一瞬にやんなきゃいけないっていう稀なスポーツです。しかもバレーボールっていうのはネットを超えてきたボールを持った瞬間に敵はどこにいるのか、敵は味方にいるんです。会社組織と一緒です。味方だと思ってたやつが敵なんです。ミスしたら相手に一点入るんです。だから、強いチームを作るのに必要な課題解決力を持つ人材、チームを統率できるリーダー、そういったものを育成できる力がバレーボールにはあるんだ、ということをメインして普及させていったほうがいいんじゃないかと思う。単純にバレーボールやれーっていうよりも、バレーボールっていうのは社会に出るときに役に立つスポーツですよっていう営業が大事なんじゃないかと思っています。それは僕がバレーボールで育てられたからです。そりゃ、ボコボコに殴られたこともありますよ、けど、不思議なことに恨んでないです。そういった手を挙げろとか挙げるなっていう問題ではなく、バレーを経験すれば将来、あなたたちは立派なリーダーになれる、立派な社会人として活躍できますよ、という切り口も必要だと思っております。

シンポジウム「地域から日本のバレーボールを変える～オガールベースの挑戦～」

会　場：紫波町情報交流館大スタジオ

司　会：吉田　清司（専修大学）

シンポジスト：岡崎　正信（オガールベース株式会社代表取締役）

綱嶋　久子（NPO アウルズ紫波スポーツアカデミー）

Ｑ１

今までの都市再生事業とオガールプロジェクトはやり方が違うと思います。そのなかで一番難しかったことはなんですか。

Ａ１

（岡崎）

どうせ無理という逆風に耐えられるかどうかが大変だった。逆風に耐えるために論理的に事業を構築するしかない。どうせ無理は論理的ではない。「なぜ」を追求すると理論構想ができる。その「なぜ」を考えることが大変だった。

Ｑ２

１年経って見えてきた課題とそれに対してこれからどう動いていくのか。

Ａ２

（綱嶋）

材料がないまま自分で考えさせていたので、考える材料はこちらで提示していく。そのなかから選んで考えるのは子ども達。いろいろなコミュニケーションスタイルが重要だとうかがえた。

（岡崎）

ちやほやされること。弱体化してしまう。ちやほやされた時、いかに自分を律するかがテーマ。

Ｑ３

子どもに対する目標観の設定。子どものモチベーションの維持方法について。

Ａ３

（綱嶋）

誰でも１番になれるようなテーマを普段から設定している。例えば、汗を１番かいた人や声を１番大きく出した人など。練習後に自己評価と他己評価をしている。試合に出られなくても練習で１番になれるので、一生懸命取り組んでいる。

Ｑ４

野球やサッカーではなくバレーボールだからこそできること。

Ａ４

（岡崎）

バレーボールしかしらないから、バレーボールをやっている。チームの役割を気付かせる。明確に役割を与える。指導者のやり方が全く違う。でも子どもたちは自分の役割を考えるため、混乱しない。

（綱嶋）

岡崎さんと同じ。感じる能力、察する能力、思いやりを学べるもの。社会の縮図だと思って指導している。

Ｑ５

バレーボールの魅力とその魅力を教える方法。

Ａ５

（綱嶋）

それぞれの役割をまっとうしたときの喜びを共感できる。１番を目指す過程で我慢すること、努力することなどの人間が育つところが魅力だと感じている。

（岡崎）

方言の違いで言葉が通じなくてもボールとネットがあれば通じる。役割があることが大切だと学べる。役割がきちっとあることと、１人が２回ボールが触れないルールが魅力だと思っている。

オンコートレクチャー「リーダーの育成を目的としたジュニア指導」

講　師：綱嶋　久子氏（NPO アウルズ紫波スポーツアカデミー）

解　説：岡崎　正信氏（オガールベース株式会社代表取締役）

場　所：オガールベース内，オガールアリーナ

１．ウォーミングアップ

・鬼を４人決めてドッジボールゲーム

４人の鬼がそれぞれボールを持ち、それ以外の子どもたちは体育館内を逃げまわる。鬼にボールを当てられた人は即鬼と交代となり、最後に鬼だった４人は腕立て伏せを５回行った。

２．２人１組でパスの練習

１）直上パス

まずはオーバーハンドパスで１人 10 回直上パスをし、相手にパスをする。これを各２回行う。オーバーハンドパスが終了したら、次は同じことをアンダーハンドパスで行う。

２）オーバーハンドパス

３）アンダーハンドパス

３．スパイク練習

１）ミート練習

指導者が投げたボールをネット下に打ち込む練習を行う。まず男子が先に練習に入り、その際、女子がボール拾いを行う。同じように女子が練習に入った際は、男子がボール拾いを行う。子どもたち同士、打つ人の名前を大きな声で呼び合う光景も見られた。

２）レフト、センター、ライトに分かれてスパイク練習

レフト、センター、ライトに分かれ、指導者は一番大きな声でボールを呼んだ人に対してボールをあげた。ミート練習の時と同様に、男女交代で練習及びボール拾いを行った。

３）レフト、センター、ライトに分かれて乱れたトスに対するスパイク練習

先ほどのスパイク練習と同様に、指導者は一番大きな声でボールを呼んだ人に対して、ネットから離したボールや、低いボールをあげた。通常のスパイク練習ではしっかりと助走が取れていたが、この練習ではそうはいかず、オーバーハンドパスやアンダーハンドパスで相手コートに返す光景も多く見られた。

４．レシーブ練習

・４人（５人）＋指導者でレシーブ練習

コートに４人（５人）ずつ入り、ネット近くに立つ指導者にボールが返せるようにする練習。指導者は強打やフェイントを交えながらボール出しを行い、１度で指導者に返せなかったボールは他の人がつないで指導者にボールを返す。コートに入っていない子どもたちは、ボール拾いやボール渡しを行った。

５．サーブ練習

アンダーハンドサーブやフローターサーブなど、それぞれ自分が一番自信を持って打てるサーブを練習した。

６．ゲーム練習

男子チームと女子チームに分かれて10対10から始まるゲーム練習。序盤は両チームともレセプションがうまくいかずに相手に点数を与えてしまうことが多かったが、ラリーを重ねていくにつれてボールを落とす回数が減っていった。コートに入らない子どもたちは得点係やラインズマンなどの補助役を行った。

７．振り返り

数名の子どもたちが今日のオンコートレクチャーの感想を発表した。発表をした子どもに対して拍手が送られた。

オンコートレクチャー質疑応答

Ｑ１：子どもたちの成長した部分はどこか

Ａ：1 年前は全員初心者であったが、現在は子どもたち自身が「もっと上手になりたい」という向上心をもって練習に取り組んでいる。また、最初は「集合」と声をかけてもなかなか集まらなかった子どもたちが、今では誰が 1 番早くに集合し、周りに指示を出すリーダーになれるかを競い合うようになった。技術の成長はもちろんのこと、このようなリーダーシップを発揮する姿勢が見られるようになったことが 1 番の成長だと思う。

Ａ：対人パスをする際、子どもたちは誰しもが「上手な人」と組みたがり、対人パスが続かないと「すねてしまう」子どもがいた。そこで「いいパスとは、相手の人が取りやすいパスだよ」という風に指導をしたところ、お互いが責め合うことなくパスを続けられるようになった。

Ｑ２：女子のスパイク練習の際に、ライトのポジションに誰もいない時があったが、それはよいのか

Ａ：特に問題はない。元々このチームは、男子は元気で積極的な子が多いが女子は消極的な子が多く、練習中に黙って「しーん」となってしまうこともあった。女子が練習中に静かになってしまった際は、すぐに男子と交代をさせていた。それを繰り返すことによって女子も男子につられて練習中に声を出すようになってきた。

Ｑ３：パスやスパイクのスキルアップを促すために工夫していることは何か

Ａ：最初は少しでもボールに多く触れられるように、壁パスや壁アンダー・壁打ちなど、1 人でたくさんボールを触れる練習を行った。そこから様子を見ながら練習内容を 2 人組のパスや連携プレーの練習に移行するようにした。その際は、できる子同士で組ませるのではなく、できる子とできない子で組ませるなどの工夫をした。

Ｑ４：レシーブの姿勢の指導はどのように行っているのか

Ａ：レシーブの姿勢は「つま先より膝を少し前に、膝より肩を少し前に、肩より肘が少し前に」という形を徹底させている。このレシーブ姿勢は、練習前に子どもたちを集合させて復習をし、練習途中に忘れそうになった場合も集合をかけて復習をするという風に、繰り返し指導を行っている。

日本バレーボール学会 第２１回大会内容のご案内

場　所：　明治学院大学　白金キャンパス
〒108-8636　東京都港区白金台 1-2-37

テーマ：「セッターに求められるスキルと戦術（仮題）」

第１日　　2016 年 3 月 19 日（土）2 号館

12:00 ～　　**＜受付開始＞**

13:00 ～ 13:10　**＜開会の挨拶＞**
黒川　貞生（日本バレーボール学会第 21 回大会実行委員長）
河合　学（日本バレーボール学会会長）
亀ヶ谷　純一（日本バレーボール協会　指導普及委員会委員長）

（休憩５分）

13:15 ～ 14:45　**＜特別講演＞**
【テーマ】東京 2020 オリンピック・パラリンピック（仮題）
講　師：水野　正人（元　東京 2020 オリンピック・パラリンピック招致委員会 CEO,
ミズノ株式会社 会長）

（休憩１５分）

15:00 ～ 16:00　**＜一般研究発表　ポスターセッション＞**　2 号館

（休憩１５分）

16:15 ～ 18:15　**＜シンポジウム＞**
【テーマ】セッターに求められるスキルと戦術（仮題）
シンポジスト（４名）：
中田　久美氏（オリンピアン・久光スプリングス監督）
朝長　孝介氏（オリンピアン・大村工業高校教諭・バレーボール部監督）
海川　博文氏（東京・駿台学園中学教諭・バレーボール部監督
宇賀田　眞一氏（元杉並第一小学校教諭・東京杉一クラブ　監督）

18:30 ～ 20:00　**＜情報交換会＞**（本館 10 階　大会議室）

第２日　　2016 年 3 月 20 日（日） 2 号館

9:15 ～　　**＜受付開始＞**　2 号館ロビー

10:00 ～ 11:30　**＜フォーラム＞**　2 号館
【テーマ】バレーボールにおけるセットについて
①　セット技術・戦術の変遷
演者未定
②　セットのバイオメカニクス
縄田　亮太（愛知教育大学）　他
③　バレーボールにおけるスポーツ外傷・障害とその対応・予防（
橋本　吉登（三ツ境整形外科）他

（休憩１０分）

11:40 ～ 12:10　**＜総　会＞**

12:10 ～ 13:10　**＜休　憩＞**

13:10 ～ 15:10　**＜オンコートレクチャー＞**　パレットゾーン　アリーナ
【テーマ】セッターのコーチング　～スキルと戦術～
講師（４名）:
朝長　孝介氏（オリンピアン・大村工業）
海川　博文氏（東京・駿台学園中）
宇賀田　眞一氏（東京杉一クラブ）
北沢　浩氏（元富士通川崎レッドスピリッツ）

15:10 ～　　**＜閉会の挨拶＞**
古澤　久雄（かのやスポーツ研究所・日本バレーボール学会副会長）

※変更があった場合は、日本バレーボール学会ホームページにアップします。
※会員の方々には、本学会大会開催要項、一般研究発表申込要領等を 10 月初旬頃に郵送します。

日本バレーボール学会 2015 年度 調査研究費申請要項

1. 目的

調査研究費は，バレーボールに関する研究に対して助成を行い、研究の促進を図ることを目的とするものである。

2. 採用件数・助成額

2015 年度の募集件数、助成額は以下の通りである。

採用件数　若干数　　助成額　1 件　15 万円（上限）

3. 研究テーマ・内容

研究のテーマ・内容はバレーボールに関する内容とする。また、あらかじめ研究テーマ・内容を設定して募集する場合もある。ただし、2015 年度については、特に研究テーマ・内容を設定しない。

4. 申請資格

日本バレーボール学会会員の個人またはグループとする。

5. 申請手続

『調査研究費申請書様式』（日本バレーボール学会 Web サイトよりダウンロード可能）に必要事項を記入し、申請期限までに以下のメールアドレスに、メール添付で送信すること。

(1)　申請期限　　2016 年 1 月 8 日（金）（必着）

(2)　申請書の送信先　　E-Mail：tanakah@ic.daito.ac.jp

〒 355-8501　埼玉県東松山市岩殿 560　大東文化大学　スポーツ・健康科学部

日本バレーボール学会総務委員長　田中博史　宛

TEL.0493-31-1557　　FAX.0493-31-1561

6. 申請手続き上の注意

(1)　グループで申請する場合、研究代表者が申請者となること。

(2)　研究代表者を含め、共同研究者の全員が、2015 年度までの年会費を納入済みであることを確認して申請すること。未納の会員名が記載されていた場合は、無条件で選考対象から除外する。なお、特別会員（顧問等）については、その限りではない。

7. 調査研究費助成の決定

(1)　選考は、選考委員会での結果を受け理事会にて決定する。

(2)　選考に際しては、研究計画・方法の具体性、研究組織の適切性などを考慮するとともに、日本バレーボール学会の知的資産として共有できるものを優先する。

(3)　選考の結果は，総会にて報告され、その後、文書またはメールで通知する。

8. 研究成果の報告等

(1)　研究期間は、2016 年 4 月 1 日～ 2017 年 3 月末日までとし、研究代表者は、その研究成果を翌年度発刊予定の機関誌『バレーボール研究』に投稿しなければならない。なお、投稿に際しては、原則として、日本バレーボール学会大会での発表を前提とする。

(2)　研究代表者は、調査研究費の決算報告書を、研究期間終了後の翌月末までに、日本バレーボール学会に提出しなければならない。

(3)　研究成果の発表にあたっては、日本バレーボール学会調査研究費助成に基づくものであることを明記すること。

日本バレーボール学会機関誌「バレーボール研究」
第 18 巻への投稿論文を募集します!

本学会では機関誌「バレーボール研究」を毎年６月に発刊しています。バレーボールに関する研究業績の発表と、会員相互の情報交換の場として大いに活用していただきたいと思います。

独創的な原著論文はもちろんですが、会員の皆様方が日頃コートの上で指導されている指導法や実践記録、また授業や練習の実践例などの報告も掲載し、あらゆる角度からバレーボールの理論と実践の融合を図りたいと考えています。

なお、投稿に際しては投稿規定（既刊機関誌および JSVR ホームページに掲載）を参照の上、下記編集委員会宛に送付願います。投稿種類としては、1）総説、2）原著論文、3）実践論文、4）研究資料、5）指導実践報告、6）内外の研究動向、7）その他、があります。投稿の際は希望種別を明記するようお願いします。ただ、査読の結果、投稿種別が変更になることがありますのでご了承下さい。投稿は、オンライン（電子ファイル）の他、郵送でも受け付けています。投稿締切はありませんが、当該年度の機関誌に掲載するためには、２月末までに投稿していただく必要があります。３月以降の投稿論文については、査読、編集日程の都合上、次年度の掲載になります。

会員の皆様から多くの投稿をお待ちしています。

オンライン投稿宛先
大東文化大学　横谷勇一宛
y-yokoya@ic.daito.ac.jp

郵送先：〒 184-8501　東京都小金井市貫井北町
4-1-1 東京学芸大学
健康・スポーツ科学講座　高橋宏文気付
「日本バレーボール学会」 編集委員会宛

渉外委員会よりお願い

本年度より渉外委員会委員長を拝命いたしましたびわこ成蹊スポーツ大学に勤務しております鳥羽賢二と申します。過去に本学会での主立った経験もございませんが、微力ながら本会のお役にたてるように尽力させていただく所存です。

さて、当会での主な役割は、学会の収入増に対しどのような方策があり、それをどのように実現していくかだと思っております。まずは、各大会でのスポンサー企業様のご意向に沿う内容で、いかに広告スポンサーのお願いと獲得ができるかだと想われます。そのためには、会員の皆様方によるバレーボール競技について充実した科学的発信が重要かと思う次第です。どうかご協力のほどをお願いいたします。さらには、学会員を今後さらに拡大し、会費増にもつなげていけるしくみを創りたいと検討しております。研究職でいらっしゃる先生方におかれましては、教え子さんの勧誘を切にお願いしたい次第です。学部・大学院生の門下生には、ぜひ本学会勧誘のお声がけをお願いいたします。また、過去に本学会で論文投稿や発表等を実施してくださった門下生がすでに退会されている方がいらっしゃいましたら、合わせて再度ご入会いただくように、お声掛けいただけましたら幸甚です。また、それぞれのお立場で本学会へぜひご入会いただきたい方がお近くにいらっしゃいましたら、積極的にご勧誘いただきますようにお願いいたします。

今後、日本のスポーツ界の発展にともない、ますますスポーツの科学的エビデンスが求められていくかと存じます。本学会がさらにバレーボール競技の発展に寄与できますよう、本書面をお借りして、皆さま方のご協力をお願いする次第です。

今後とも引き続きご高配のほど、よろしくお願いいたします。

渉外委員会委員長　鳥羽賢二

事務局便り

8－9月には、全国各地でワールド・カップ・バレー2015が開催され、日本戦全22試合はゴールデン・タイムでTV放送されました。選手の名前はもちろん、レセプションやディグといった技術用語も多くの方に知っていただくことができ、バレーボールに興味を持っていただける絶好の機会となりました。残念ながら、女子は5位、男子は6位だったため、男女とも上位2か国に与えられるリオ・デ・ジャネイロ・オリンピック出場権を得ることはできませんでしたが、来年5月のOQTや8月の本大会で日本代表が活躍することを願っています。また、本年10月から、待望のアニメ『ハイキュー！！セカンドシーズン』が放送されます。多くの子どもたちがこれをきっかけにバレーボールをはじめてくれるはずです。しかしながら、私の住む静岡ではBS11のみ…地上波では放送されません（涙）。

さて、8月に岩手県紫波町で開催されました「2015バレーボールミーティング（於：オガールプラザ、

オガールベース)」は、「地域から日本のバレーボールを変える～オガールベースの挑戦～」をテーマに多くの参加者を集め、成功裏に終了することができました。開催にあたりまして、多くの会員の皆様にご協力、ご支援をいただきましたこと、御礼申し上げます。下半期も、バレーボールの発展に寄与できるよう、会員の皆様によるご協力の下、尽力してまいります。特に、2016 年 3 月 19 ～ 20 日には、明治学院大学（白金キャンパス）にて第 21 回研究大会を開催します。この研究大会では、「セッターに求められるスキルと戦術（仮)」をテーマに、特別講演や一般研究発表、シンポジウム、フォーラム、オンコート・レクチャーなどを予定しております。詳細につきましては、決定し次第、学会 HP で告知致します。このような学会活動におきましては、会員の皆様のご理解、ご協力が欠かせません。積極的に参加いただくとともに、学会の活動に多くのご意見をいただければ幸いです。

住所変更･所属変更があった場合は、学会 HP の登録情報変更フォームより送信してください（ページ･トップの「登録・変更」)。ご本人からの申告がないと発刊物や連絡などの郵送が出来ません。ご協力のほどお願いします。また、機関誌・ニュースレター等が届いていない場合は、事務局までご連絡いただければ幸いです。

事務局移転にあわせて､4 月にゆうちょ銀行の口座名を修正いたしました。「日本（ニホン)」が入ります。年会費振込の際には、下記をご参照ください。　＜Ｔ＞

＜年会費振込先＞

郵便口座名称：日本バレーボール学会

郵便口座番号：00240 － 2 － 66791

また、他の金融機関からの振込の場合、以下の通りになります。

銀行名　ゆうちょ銀行

金融機関コード　9900

店番　029

店名　０二九店（ゼロニキュウ店）

預金種目　当座

口座番号　0066791

カナ氏名　ニホンバレーボールガッカイ

「編 集 後 記」

今年度でバレーボール学会が発足して 20 年、ついに成人となりました。この学会機関誌「バレーボール研究」も今回で 17 巻となり、着実に学会として研究成果を積み重ねてきていると感じます。第 14 巻から４年間、本機関誌の編集を担当させていただきました。第１巻から続いてきた学会機関誌としてのクオリティを下げることなく引き継ぐことができたのだろうかと不安に思うところもありますが、この４年間、多くの投稿者の情熱と査読者のご協力により、何とか学会の研究成果を記録に残すことができたのではないかと思っています。投稿される論文の多くは原著論文として投稿されますが、査読の結果、研究資料になったり、掲載不可になることも少なくありません。また 、査読の途中で著者から取り下げられることもあります。こうした査読の関門を通過することで、機関誌のクオリティが維持されていると言えます。ただ、この機関誌もまだ 17 歳、さらに新しい研究や学会大会の取り組みを取り込んでいくことで、もっと大きく成長できると信じています。今後とも機関誌への積極的な投稿を期待します。

（小川　宏）

日本バレーボール学会２０１５～２０１７年度役員構成

お詫びと訂正：機関誌 17 巻最終ページ（p. 94）に掲載されている 2015 ～ 2017 年役員構成ですが、理事長の石手先生が抜けおりました。大変失礼いたしました。役員構成は以下のようになっております。

（敬称略、50 音順）

名誉会長：遠藤　俊郎

特別顧問：栃掘　申二、矢島　忠明

顧　　川：明石　正和、河合　武司、清川　勝行、島律　大宜、高橋　和之、原田　智、森田　昭子

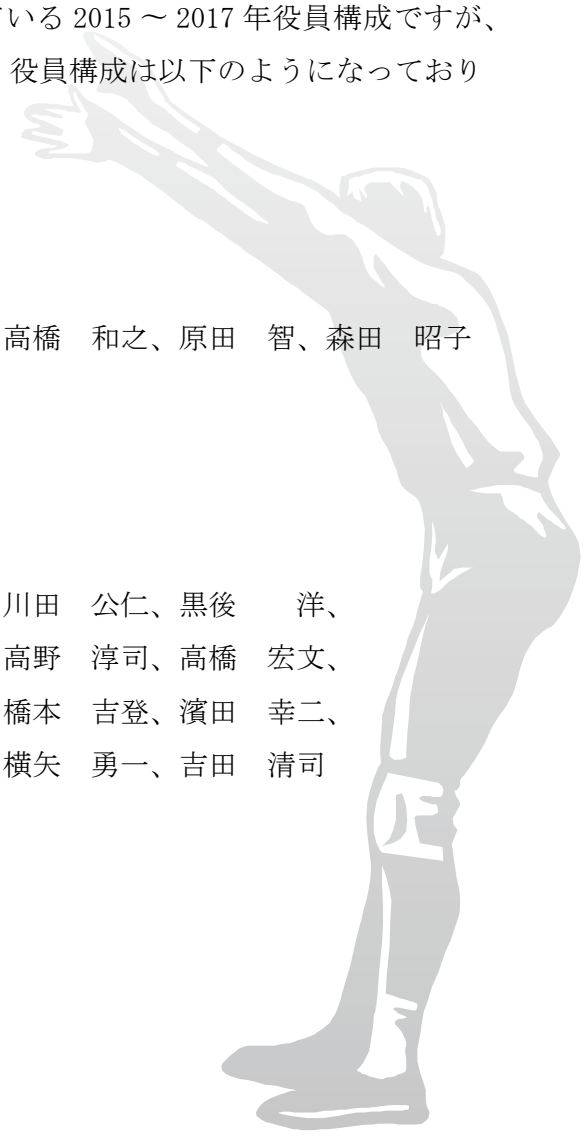
会　　長：河合　学

副 会 長：黒川　貞生、古澤　久雄

監　　事：柏森　康雄、廣　紀江

理 事 長：石手　靖

理　　事：板倉　尚子、内田　和寿、小川　　宏、金子美由紀、川田　公仁、黒後　　洋、
小林　　海、篠村　朋樹、杉山　仁志、高根　信吾、高野　淳司、高橋　宏文、
田中　博史、鳥羽　賢二、中西　康己、市村　忠弘、橋本　吉登、濱田　幸二、
廣　　美里、松井　泰二、安田　　貢、湯澤　芳貴、横矢　勇一、吉田　清司



The Japanese Society of Volleyball Research